

いくつかあげてみましょう。

統合グラフィックスソフトウェアシステムの開発，中小企業国際化の問題点展望，外食産業の重回帰モデルとインタビュー調査による分析，分枝限定法によるIP解法のソフト作成とその講義スケジューリング問題への応用，金融ネットワークの歴史と現状の分析，LANターミナル間の通信ソフト開発，PERTの建築業の実例への応用，チャーノフ顔グラフの恣意性の検討とソフト作成，などとなっています。

これで見てもわかるとおり，管理工学といっても特にORを研究するとは決まっておらず，学生は部門外の教員資源を活用していろいろなトピックを勉強しています。逆に，経営とかマーケティング専攻の学生がORや統計手法を使ったり，情報とかネットワークの研究をするのに管理工学部門の教官と協力することも多く，ORや情報の話は商学部のなかでまさにインターディシプリナリーにとりあげられています。

工学部に比べて，われわれの学部では大学院生の絶対数が少なく，管理工学部門に属すものもドクター，マスターのおおの毎年数人程度と多少さみしい状態です。そ

れも，ORプロパーという研究に取り組む学生は少なくほとんどは経営論，組織論，経済学との境界分野に関するものです。ちなみに今年管理工学部門に属す大学院生の研究分野の例をあげれば，情報と企業文化，医療経済学の組織からのアプローチ，中国の消費財購入の予測，情報と企業成長，などです。なかには，ORに必要な数学（位相数学，線形代数など）そのものに果敢にアタックする修士の学生もいたりします。

全体とするとわれわれのOR教育は，工学部のそれに比べかなり手薄といえましょう。そのためにかえて経営論，組織論，情報論，ネットワーク論，会計，経済，マーケティングなどとの境界分野との融合が，工学部におけるより豊富になる環境が存在しているかもしれません。企業の学部卒業生の採用も，最近は工科系・文科系という区別が次第に薄くなっています（実際われわれの卒業生の多くはシステム開発とか，情報システム部に配属されています）。社会の多様性を考えるとき，一橋商学部のOR教育は，改善されるべき点は数多く存在することは確かですが，大筋では望ましい方向にあるといえるかもしれません。（金子 郁容）

●ミニミニ●

●OR●

逆もまた真なり

建築物の音響設計というものは，なかなか面白く，また難しいものようだ。日光東照宮の鳴き竜は有名だが，同様の現象は東京の新丸の内ビルでも聞かれる。もっとも，これは意図したものではないそうだ。

昔の忍者屋敷には，天井裏に楕円型の壁が設けられており，一方の焦点での話声がもう一方の焦点に集まるような盗聴装置があったという。実物をじかに見る機会を得ていないので真偽のほどはわからないが，子供の頃この話を聞いたときには，本当に感心したものだ。

学校の教室では音響効果が大切だ。先生の声の通りにくい教室がある。見ると，天井に太い梁が露出しており，これが黒板と平行に走っている。先生の

声はこの梁にあたってはね返ってしまう。実際，人が教壇で話しているときに，黒板の方から後部にむかってゆっくりと歩いてみると，梁の下を通る度に声が聞き取りにくくなるのがはっきりとわかる。

某大学で，新しい教室を建てることになった。建築家がプランをもってきた。教室全体を放物線型にしてその教壇をその焦点にもってくるというものだ。

建築家は得意気に説明する：

「こうすれば先生の声が皆に聞こえます。たぶん，マイクは要らないでしょう」

しばらく図面を見ていた先生いわく，

「でもねー，学生たちがおしゃべりを始めたら，その声は全部先生の所へ集まっちゃうんでしょ？」

（からくり堂主人）